

「政治と文学」論争 — 『近代文学』の「戦中」と「戦後」 — On the Dispute about “Politics” and “Literature”

綿貫 ゆり
WATANUKI Yuri

In January 1946, a new literary coterie magazine “Kindai Bungaku” was launched. The coterie shared an awareness of issues, and this awareness caused a dispute about “Politics” and “Literature”.

There have been a few studies that refer to the argument in the field of literature. However these studies ignore its historical context. On the other hand, in the field of history, the philosophical meaning of the controversy has never been analyzed.

The aim of this article is to see the dispute in the context of Japan’s before and during the war history, focusing on the coterie’s awareness of issues, especially on two authors, Ara Masato and Hirano Ken.

1. はじめに

敗戦後すぐの焼け跡のなか、文字通りの「青空」編集会議から出発し、あらゆる不利な条件を乗り越え、1946年1月に『近代文学』が創刊されてから70年を経た。この雑誌の出現は、抑圧された者たちの、内に蓄積されたエネルギーの「爆発」（埴谷の言葉でいう、「全開轉のジェット・エンジン¹⁾）と呼ぶべきものであった。

しかしながら、『近代文学』の同人たちの営みは、歴史的に重要な点を多く有しているにもかかわらず、創刊当時の複雑な歴史的な文脈も相まって、歴史学の分野において、その存在の重さを正当に評価されて来ぬまま、現在に至っている。

歴史学において俎上に登った戦争と文学者・戦争と知識人の問題は、「獄中非転向というほんの一握りの稀有な人々を除き、多くは転向・戦争協力を余儀なくされ、財産を所有していた一部の者が非協力を貫いた例もある」といった結論に集約されてきたといえる²⁾。

1937年の日中戦争開戦以降の戦争と知識人の立場選択については北河賢三が知識人を大別し、分析を行っているが、彼自身が序論で「暗い谷間」というフレーズに言及しているものの、それを提唱した知識人・荒正人がいかなる文学的活動を行っていたかということには、何ら言及がない³⁾。

言論弾圧という点から見ると、1937年7月7日の日中戦争を境に、統制のレベルが全く異なる次元となる—つまり治安維持法に抵触する（時にはでっち上げも含め）幅が一層広範になり、「書くこと」が「死」に直結する—ことに力点が置かれてきたことは理由のあることである。

だが、1928年の3・15事件と翌年の4・16事件での共産党（およびその関係団体）への弾圧、1933年の佐野学・鍋山貞親の転向声明、1937年12月の人民戦線事件による非共産党系左翼運動の壊滅という流れの中で、知識人・文学者（必ずしも左翼運動に携わっていなかったシンパの人々も含め）の営みは、複眼的に扱われてきたとは、言い難い。

日本の降伏により、少数の非転向者（徳田球一・志賀義雄・宮本顕治ら）が脚光を浴び、

日本共産党は「侵略戦争に抵抗した唯一の党、少なくとも、もっとも手を汚すことの少なかった党というイメージ⁴⁾」を獲得した。戦後直後のこうした状況において、戦前の共産党の行動へ疑問を投げかける声は、ほとんど注目されてこなかったといつてよい。

以上のように、これまで歴史学が光を当てずに来た、荒正人をはじめとする『近代文学』の問題意識を、整理し提示することが本稿の目的である。『近代文学』発足時の同人7名(埴谷雄高・平野謙・本多秋五・荒正人・佐々木基一・山室静・小田切秀雄)に共有されていた関心のうち、より具体的に明らかとすべき点は、戦前の共産党の思想と運動が孕んだ問題であると、本稿は位置付ける。これは、同人たちのほぼ全員が、共産党が指導する左翼運動に携わった経験を持ち、そのときの経験の根底から引き出した、いわば「実存的」問いであった⁵⁾。

2. 文学「研究」における戦後「政治と文学」論争

果たして、『近代文学』同人らによって投げかけられた深刻かつ重要な問いは、突きつけられた党の側との間で、ひとつの「論争」を引き起こした。そしてこの論争は、文学研究において言及される際、戦後「政治と文学」論争として呼び慣わされてきた。しかし、戦中の文学運動の在り方に端を発する問題提起は、文学「研究」の中では、歴史的文脈を顧慮しているものが殆ど存在していない上に、論争の直接の原因となったテキストを分析しているものもほぼ皆無である。それらの多くは、論争が存在したという事実とその経過をなぞり、それに感想を付け加えたものといつても差し支えない。

戦後「政治と文学」論争の中心テキストを論じた1960年代末から70年代にかけての論稿に共通する特徴として、まず、中野重治という大作家の有する—ピエール・ブルデューの言う—象徴資本の高さを前提とした傾向が観察される。

たとえば、伊豆利彦は中野の主張を「原理的に正しく美しく人間的であった」とし、荒や平野が戦中の「体験に固執し現実の暗さのみ強調して原理原則を見うしなう危険があった⁶⁾」と論述している。ここで伊豆が述べる「原理原則」とは、「日本の軍国主義や戦後も残存する戦争勢力との戦い」であり、「戦後の日本国民を導くものは、徹底して戦争とたたかった共産主義者である」ということを指している。中野が論争の口火を切った「批評の人間性」において、荒・平野の左翼運動内部からの変革を求める声を、「不利な条件の下で伸びようと努力する民主主義的文學運動を彼らは押し返さうと力んでゐる。そして反革命の文學勢力に化粧をしてながし目をしてゐる⁷⁾」と中傷し、封殺しようとした論調を、伊豆はただ繰り返しているにすぎない。

戦前に左翼運動に携わり、捕まり、また戦中にも特高に監視され、きわめて閉塞した戦中体験を持つ二人⁸⁾が、国民を戦争に駆り立てた日本軍国主義ファシズム—反革命の勢力—の側に「ながし目」などする由もないことは分かりきっていることであり、中野の主張がいかに非論理的かつ悪意を有するものであったかは、この二文だけを見ても明らかである。だが、伊豆は「批評の人間性」のテキストそのものを分析することもなく、中野の主張のみを「正しく美しい」と無批判に受け入れているのである。

また、中野の主張を「畏敬と畏怖の念をもって、くり返し読み、議論のみごとな畳み込みにわたしはほとんど魅惑された⁹⁾」と回顧する田所は、論争から10年あまり後に、中野自身が論争当時を振り返り、「<私の荒・平野攻撃は原則的には正しくないものを含ん

でいた」と書いているのを知り、「中野の率直さに新たな信頼を感じたのを思い出す」とも述べている。

こうした評価が前提としているものは、論理的正当化を完全に欠如させた、単なる個人的中野「礼賛」に他ならない¹⁰⁾。

田所のような全面的中野支持とは対照的な立場から、この論争を複数の論稿で取り上げている吉田永宏は、論争時における中野の発言の「政治的根拠・政治的必然性をこそ、三十年を経た時点で明らかにする必要がある¹¹⁾」との問題意識に基づき、「政治の側にアクセントの打たれた、革命運動からの誤った要請」を中野の発言の背景として指摘した。だが吉田は、自らの問題の核心を掘り下げることなく、「論争に一応の『決着』をつけたものが、つまりは文学の論理ではなく、政治の論理であった¹²⁾」とだけ結論した。

吉田は、「政治の優位性」という言葉を吟味することなく繰り返すのみで、その実質は、中野自身が論争の後に行った「自己批判」という事実をただ反復しているにすぎない¹³⁾。

また、磯貝英夫は「批評の人間性」について、「イデオロギーの解放された戦後においてかえってカンの狂いのようなものを見せたことは、多くのことを考えさせる¹⁴⁾」といった感想だけを述べ、他方、「批評の人間性」において攻撃対象とされた、荒正人の「第二の青春」について「荒の主張は、今日では、その異様なほどの力みぶりに違和感はあるにしても、すべて、結論的には自然に肯定されるものばかりだと言ってよい¹⁵⁾」という。

論争における中野の言動を「カンの狂い」とすませてしまう深層には、「中野は本来であれば間違わない」という無意識的かつ、やみくもな信頼が潜んでいたと言わざるを得ない。また磯貝は、荒の評論集『第二の青春』が「重要な歴史的意義を持っている」と評価してはいるものの、その「歴史的意義」の「中身」については、一切言及/分析がない。

論争の一翼を担った、荒の「第二の青春」について、別なる立場を採る論稿にも、少し目を向けておきたい。「第二の青春」ということばが当時有した昂りを、紅野敏郎は「それは普通名詞のようなかたちですみやかに、ふかぶかと人々に受け入れられていった。『近代文学』の影響圏内にあつた人々のみが荒氏のこの発言を受けとめたのではなく、文芸評論の域をも越えた、全人生的なものとして広く訴える力を持つてもいた¹⁶⁾」と、自らの感慨も込めて回想する。紅野は、昭和十年代の体験なくして、「第二の青春」は生まれえなかったと、荒の戦中の仕事との連続性に力点を置いて、肯定的に評価している¹⁷⁾。だが、荒の仕事ぶりを「精力的で、しかも着実に合理的ですらある」と肯定するにとどまり、「仕事」の内容にまで踏み込んだ議論には至っていない¹⁸⁾。

以上、文学「研究」における論争の位置付けを確認してきたが、共産党中央の意志を代弁する中野重治と、それを内在的に批判する平野謙と荒正人とのあいだに、「論争」が存在したことの意味—核心部分—を捉えた論稿は、未だ存在していない。

本稿は、雑誌『近代文学』が創刊されるまでの戦中からの同人の歩みを含め、雑誌の歴史的位置付けを行うとともに、彼らの問題提起から発生した論争を、当時の政治的文脈から分析することにより、問題の核心を浮かび上がらせることを目的とし、論を進めることとしたい。

3. 『近代文学』前夜—左翼運動の挫折・戦中の抵抗—

3-1. 「政治と文学」論争のはじまり

1945年12月という、敗戦の年の暮れに『近代文学』は創刊された。「創刊に従事した同人達は、それぞれ、嘗て左翼運動に関わりをもつてゐたから、この敗戦といふ契機がなければ、その熱情を文筆に向けることは絶対に不可能であつたのであつて、それだけにその熱情の現はれは、やや暫く自他を巻きこんでしまふほどの奔騰力をもつてゐた。荒正人の『第二の青春』はそのやうな雰圍氣を描いてをり、そして、また、その雰圍氣のなかの産物である¹⁹⁾」と埴谷雄高は述べている。

荒正人の「第二の青春」は1946年1月5日に書かれた。この文章こそ、「政治と文学」論争の端緒となったものである。『近代文学』創刊時における、同人の共有した問題意識を、本田秋五は「藝術 歴史 人間」として提出したが、同創刊号に掲載された荒の「第二の青春」は「人間」に焦点を当てて書かれたものであった。

荒は「人間」という存在に問いを投げかける。

わたくしの感覚に映る人間のすがたはこれにほかならない。(自らがみづからに)「人間はうつくしいか。」「否、みにくい。」「……「人間はみにくいのか。」「否、否、うつくしいのだ。」「……「人間は偉大であるか。」「否、卑小だ。」「……「人間は卑小であるのか。」「否、否、偉大なのだ。」「——そして沈黙²⁰⁾。

この問答は、彼が中学3、4年時にキリスト教的ヒューマニズムと訣別し、その後、旧制山口高校2年のころから左翼運動に関わった際にも、自己の思想の中核に位置した左派的「ヒューマニズム」への懐疑・幻滅を示している。荒にとっての「第一の青春」は、「ヒューマニズムのためのたたかい」であった。ここで、荒の左翼運動の経験を振り返っておきたい。

3-2. 荒正人の「第一の青春」と「幻滅」

荒にとって、山口高等学校時代(1930年入学)にR・S(読書会)に参加したことが、左翼運動への入口であった。週一回で場所も一回ごと変わる形式を採ったその会は、拡大して週二回の開催となり、その組織化のために同好会も作られた。会が終わると、メモ類は一切焼却し、ひとりひとり足音を忍ばせて立ち去った。当時の最も輝かしい星として、荒自身が蔵原惟人を挙げており、またその頃「全協」の日本鉱山労働組合に所属していたオルグと密接な交渉があった²¹⁾。

1929年(昭和4年)には『改造』の懸賞論文で宮本顕治の「敗北の文学」が一席となり、1931年10月に蔵原惟人の提唱で日本プロレタリア文化連盟(コップ)が結成され、プロレタリア文化運動は「頂点」を迎えていた。しかし、満州事変の勃発と相前後して結成されたコップを当局が放置するはずもなく、コップに所属する各文化団体に集中的な弾圧が加えられていった。1932年3月には、プロレタリア科学研究所(プロ科)の人々が逮捕された。その中には、蔵原惟人、宮本百合子、中野重治、村山知義などがおり、宮本顕治や小林多喜二、杉本良吉らは、これを契機として非合法生活へと入ってゆく²²⁾。ちなみに、平野謙はプロレタリア科学研究所の芸術学研究部会に所属し、本多秋五・山室静とともに

三人組を成していた。

荒は、1933年（昭和8年）に「英雄崇拜から一瞬にして醒めた」としているが、1933年6月は、共産党最高幹部の佐野学と鍋山貞親が獄中で転向声明を発表した年であった。彼らは、コミンテルン批判、天皇制擁護論、日本を中心とする一国社会主義論などを展開した。この出来事が、左翼運動—「新しく魅力的なヒューマニズム」を信じた荒の「第一の青春」に終止符を打ったのである。

文学に携わるものにとって、観念は無にちかく、人間こそ一切であった。…一言にしていへば、わたくしは自らの青春を棄てるとともに人間に絶望した。牢獄にゆくか、國外に逃亡するか、これ以外に感覚としての生きた青春を確保する手段はないやうに思われた。…かつては「奴はなかなかいい」といふことばが何處でも聞かれたが、こんどは裏返したやうに、あいつも駄目、こいつも駄目、蔭口、中傷、不信、嫉視……これが同志愛のなれのはてであった²³⁾。

しかし荒は、旧制学校での運動で謹慎処分を受けた後、大学で出会った仲間と小研究会を立ち上げ、戦中も反体制・反戦の思想を貫いた。以下に、その過程を追ってみたい。

3-3.「戦中」の文芸活動と逮捕

1935年初頭に共産党の組織中心部が壊滅し、「赤旗」が第185号で停止された後、1936年の夏ころより「文芸学研究会」という名の週一回の読書会を、同じ東京帝国大学文学部に所属した佐々木基一（永井善次郎）・久保田正文・荒正人の三名で行うようになった。1937年に小田切秀雄が会に加わり、それと入れ替わるやうに久保田正文が研究会から退き、三人はその後（1943年春に小田切に招集が来るまで）約6年間、読書会を継続して行った²⁴⁾。

荒・佐々木・小田切は、『近代文学』のいわゆる「七人の侍」のうちの三名であり、「世田谷トリオ」と呼ばれるグループとなった。久保田が研究会をやめた時期のことを、小田切は「そのころはもう共産党やプロレタリア文学・文化運動の諸組織や学生運動の組織はすべてつぶされ去っており、ゆるやかな自主的な文学グループの集まりでさえ、旧左翼ないしそれに近い者がいくらかでも参加していれば、特高警察はかぎまわり、何かの理由をつけてたちまち全員を検挙しムリヤリ治安維持法違反にひっかけようとしていた²⁵⁾」と述べている。1937年7月に始まった日中戦争下において、ほんの3・4名で行う「読書会」すら、その身を危険に晒す行為であったことは、記憶されたい。

この研究会は、マルクス主義の立場に立つ「文芸学」の樹立を目指していた。荒はこの集いを心の依り所とし、昭和十年代の自らの勉学を進めていった。また、山口高等学校で学生運動に参加した者が学士会館などに定期的集った「青鳳会」を通じ、新聞では知ることのできない情報を交換した。会員が共通して、日本帝国主義の崩壊とそれに代わるソヴェート日本の樹立という信念を抱いていた²⁶⁾。

1938年に荒は最終学年を迎えたが、その翌春、戦局を見守り続けてきたスペイン内戦が、フランコの勝利という形で終結した。それは荒にとっての「希望」・「夢」の粉砕を意味した。同じ1939年8月に雑誌『批評』、10月に雑誌『構想』²⁷⁾が、そして12月には雑誌『現代文学』が創刊された。荒は「赤木俊」のペンネームで、主に『現代文学』において、書

評を中心とした執筆活動を行った²⁸⁾。

1944年4月末、疎開先である久喜(埼玉県)の荒の元に白紙(逮捕状)が届く。理由は佐々木・小田切との読書会(研究会)であった。その年末に「無罪」で東京拘置所から釈放となり、大井広介が手配した九州の炭鉱会社へと勤めることになった。1945年1月には九州の本社へ赴任したが、戦局の悪化に伴い、3月には大空襲直後の東京を經由して、疎開先の久喜へ帰る²⁹⁾。

ここまで見てきた、荒の左翼運動における挫折、および小規模な研究会を理由とした逮捕の原因は、直接的には治安維持法をはじめとする外部要因であるとも言える。だが、荒が外部—日本軍国主義・ファシズム—のみを原因と見なしていたならば、左翼運動の旗印であったはずの「ヒューマニズム」に対する幻滅の告白はなされなかったであろう。殊に、左翼運動の経験については、左翼運動—共産党組織—の内部に存在した問題が、「挫折」の一因となっていることを示しているのである。

荒の「第二の青春」につづき、「ひとつの反措定」と「基準の確立」を書いた平野謙もまた、荒の提起した問題意識を共有していた。平野は、

私の真意は、左翼的ヘロイズムの安易な復活に対する警戒、感傷を裏返しにした左翼的ヘロイズムへの倚りかかりによる戦争責任のアリバイ提出に対する警戒にかかつてゐた³⁰⁾。

と述べ、「英雄」—獄中非転向を貫いた共産党—への、手のひらを返したような「大衆」の盲従を批判している。

では、荒に「人間」の存在、「ヒューマニズム」を疑わせ、平野に「左翼的ヘロイズム」への警戒を言わしめたものとは、いったい何であったか。もっと言えば、戦後すぐ共産党に入党していた荒と、中野を敬愛していた平野謙の二人(『新日本文学』の同人でもあった)をして、「政治と文学」論争へと向かわせたものとは、何であったのか。

この問いについて、(1) 具体的な出来事と、(1) の背景を成す—(2) 思想的態度(人間に対する態度・扱い方)の二つを、答えとして指摘することができる、私は考える。まず、具体的な出来事として現われた点から見てゆくこととする。

4. 「政治と文学」論争の背景

4-1. 論争の核を成す事件—ナルプ解散—

先に述べたプロ科の活動から、平野は(正式な話を経ず知らぬ間に)日本プロレタリア文化連盟(コップ)³¹⁾の書記局メンバーに「抜擢」され、左翼運動への「踏み切りの決意」なしに半非合法活動へと入っていった。コップに加盟している文化団体のひとつに、日本プロレタリア作家同盟(ナルプ)が属していた。作家同盟員は、プロレタリア文学あるいはマルクス主義文学の限定内ではあれ、文学を生涯の生業にすべく集った人々であった。とはいえ作家同盟は、党中央→コップ指導部→作家同盟指導部→一般同盟員というピラミッド型のヒエラルキーの中に位置する組織であった³²⁾。

1934年2月、ナルプが解散声明を発表したが、問題はこの「出来事」が発生した原因であった。外部要因としては、治安維持法によるコップ加盟団体への圧力の強化があっ

た³³⁾。しかし、同時に存在した内部要因こそは、ここで確認すべき事柄である。

ナルプが合法性を失う見通しが強まった段階にあっても、ナルプ指導部（小林多喜二や宮本顕治）は「同盟員全体をどこへどういうふうにしてゆくかという具体的な対策をぬきにして、ただ敗北主義的潮流を大声叱咤³⁴⁾」していた。ナルプ解散後に同盟員から「あくまでも合法性獲得のための努力を傾け尽くすべきであったのだ。それは指導部として当然しなければならない重大な責務の一つではなかったのか。…それを爪の垢ほどもしなかつたばかりか、てんで考えても見なかつたという一事だけでも、同盟指導部の怠慢と無責任とは十分に批判されなければならない³⁵⁾」といった批判が、すでに同時代的に多く出されていたのである。

また、1933年末には、ナルプは政党的に中立であるべきだという意見（亀井勝一郎）や、宮本らのコップから手を切れ（徳永直）といった意見が出されていた。それを一切顧みず、我に続けと叫び続けた挙句、突然の解散声明へと至った党指導部の現実感覚を欠いた「上からの指導」への疑問が、戦前から連続する問題意識となったのだった。

では続いて、もう一方の答えである思想的態度について、考えてゆくこととする。

4-2. 個としての存在を軽視する「ヒューマニズム」

4-2-1. 平野謙の問題提起

先に述べてきたナルプ解散事件を引き起こした思想的背景ともなっているもの、それは「個としての人間」を軽視する思想的態度、そして自らの内面を深く見つめる「内省の欠如」である。前者は、人間の「手段化」の問題として、荒と平野が共に取り上げている。後者は、「ヒューマニズム」の深層に在る「エゴイズム」の問題として、荒が提起したものである。

まず前者の、人間の「手段化」は、平野謙が「ひとつの反措定」において、杉本良吉の「越境事件」や、共産党のハウスキーパー「制度」を取り上げる形で問題化した。

無論、私は杉本良吉がどのような理想に憑かれ、あるひはゆきづまりに直面してソヴェート潜入を決意するにいたつたかを知らない。私にハッキリしてゐることは、杉本がその目的達成のためにひとりの小柄な可愛げな年増女優を利用したといふ一事實にすぎぬ。だが、このささやかな事実が一番大切なのだ。

由来、目的のためには手段をえらばぬといふ點に政治の特徴がある。單に在來の政治だけではない、プロレタリア的政策にあつても、ハウス・キーパーといふやうな制度の採用された一時期があつた（越境事件の奇怪さも遠くそこに淵源する）³⁶⁾。

のちに平野は「政治と文學」『新潮』（新潮社、1946年9月号）の中で、当該箇所について、「プロレタリア的政策—私はここで遠慮した。私はハッキリ『日本共産黨の政策』と書くべきだつたかもしれぬ—にあつても、」と説明を加え、問題の所在をより明らかにしている。初出の段階で、「遠慮」があつたのは、平野が大卒では共産党を支持していたからに他ならなかつた。にも関わらず、後に述べるように、その「配慮」は、共産党中央の意向を代弁した中野の手により、「議論」として扱われたいはおろか、苛烈な侮辱の言葉の下に切り捨てられてしまったのである。

また平野は、先の「政治と文学」において、より具体的に「越境事件」が有した問題点(平野の言葉では「悪典型」)を提示する。

プロレタリア藝術運動全體につらなる一病根を確認せずにはゐられなかつたのだ。ほとんど不感症的に固着した一種の人間蔑視を！…私は誣妄の言辭を弄してゐるのではない。疑ふものは小林多喜二の『黨生活者』に描かれた「笠原」といふ女性の取扱ひかたをみよ。目的のためには手段をえらばぬ人間蔑視が「伊藤」といふ女性との見よがしな對比のもとに、運動の名において平然と肯定されてゐる³⁷⁾。

主人公の「運動」の必要性から、「笠原」は主人公のハウスキーパー³⁸⁾となることを強いられた。「政治」を理由に、女性を「道具」化し、「犠牲」にしたことを、平野は鋭く突いた³⁹⁾。この問題提起は、昭和3年～5年ころに週刊誌を賑わせた、猥雑な「ゴシップ」とは一線を画す種のものであった。共産党の運動が戦前に孕んだ問題を直視し、反省することが、戦後日本の運動の前進には必要不可欠との認識から出た、「左翼」内部からの批判であった⁴⁰⁾。しかし当時の共産党は、ハウスキーパー制度は存在しなかったとし、その批判には取り合わない方向を選択した⁴¹⁾。

『党生活者』(未完)について付言するならば、この作品において「犠牲」となったのは女性のハウスキーパーばかりではない。「須山」という男性の活動家が、小説の舞台である「倉田工業」でストライキを決行するに当たり、禁錮3年あまり(出所後は地下に潜らなければ危ない)を余儀なくされると知りながら、主人公はそれを「仕方がない」と納得する⁴²⁾。

ある一人の人間の「生命」や「身体」を、極めて不利(ほぼ確実に逮捕される)な状況と知りながら、犠牲にすることが「党のため」であり、「絶対」であるとする思考は、個々の人間の存在を軽んじていることと表裏一体である。

4-2-2 荒正人の問題提起

続いて、荒の提出した「ヒューマニズムの問題」を見てゆくこととする。1934年にナルプが解散し、軍国主義ファシズムがいつそう強まってきた情勢のもとで、「良心をまもる立場を見出そう」とする中で呼び出された言葉が「ヒューマニズム」であったと、野間宏は述べている⁴³⁾。

だが、この問題については「論争」の相手側である中野重治から、まともな「応答」がなされなかったため、残念ながら研究史と呼べるものは存在していない。ただし例外的に、三宅芳夫は『政治』の不可能性と不可能性の『政治』—戦後直後の荒正人と『近代文学』の中で、荒の「エゴイズム」の問題を取り上げ、思想的哲学的分析を行っている⁴⁴⁾。

荒は1946年2月「民衆とはたれか」において、「個としての人間」軽視を次のように指摘した。

かれは、真心から民衆を愛し、信じ、そして啓蒙しようとしてゐるのだ。にも拘らず、その素朴な志は賞むべき哉！とはいひきれない。なぜか、それかれが民衆といふものを、きはめて古い、ナロードニキ風の観念では知つてゐるが、肉體の實感を以て知つてもゐないし、愛

してもゐないからだ⁴⁵⁾。

「民衆」や「大衆」という集合的存在を自明視し、それを「信じる」「希望を抱く」という行為は、人間を「個別の」存在として見るのではなく、「塊として」見ていることに他ならない。それは、「個々の人間」の軽視という思想的態度の裏返しでもあった。

そして、「個々の人間」の奥深くに存在する「エゴイズム」—「第一の青春」において、「エゴイズム」は忌むべきものとされていた—の肯定を、次に見てみよう。

わたくしは、ヒューマニズムの假面が剥奪されたあとに露呈したエゴイズムに絶望したのだ。ひとびとをそんなすがたにまで追ひつめたものへの観念的な怒りを越えて、ぢかべたに迫ってくる実感として、人間性の根底に牢固として抜きがたく潜むエゴイズムの深淵への恐怖を一日も忘れることができなかつた⁴⁶⁾。

絶望を知らず、深淵を感じず、地獄を見ることのなかつた似而非ヒューマニストたちについて、また、第一の青春を執拗に追つてゆけば當然突きあたつた筈のエゴイズムの壁を見てみぬ振りをしてどうかごまかしてきたエゴイスティックなヒューマニストたち……ヒューマニズムの否定者としてのエゴイズム—まづこれを大胆率直にみとめよう。そして、理想主義の表皮の下にある現実主義といふ眞皮を、また英雄の衣裳を纏つた凡人を、裸眼を以てながめてみようではないか⁴⁷⁾。

また荒は、「集合としての人間=民衆」を自明視することなく、「一人の人間である私」から出発しなければならないとし、「美しい存在=人間」への幻想を捨て、人間の最奥に潜む「醜さ」を凝視した先に、「第二のヒューマニズム」へ到達できると主張した。そしてそれを実践できるのは、自分たち30代において他にないと、謳い上げる。

かれはまづなによりも自分自身を見窮めなければならぬ。その醜さ、その低さ、その愚かさ—これを双の眼に焼きつくほど凝視せねばならぬ。そして、このことを爲しうる世代は、わたくしたち三十歳代、すなはち、青春の日に理想とともに羽ばたき、ファシズムの嵐のなかに現実の壁にたたきつけられたインテリゲンチヤを措いて無いのだ…⁴⁸⁾

絶望を知り、深淵をくぐり、虚無の世界をかんじたわたくしたち三十歳代は、その故にこそかへつて、この人生を一層いとほしむことができるのだ。…この特異な、稀有の世代が、若し、第二の初戀のごとく、この人間をいまひとたび愛しうるとするならば、それはたとへよそめには、醜い、薄汚れた、垢のこびりついた、解し難い情熱と映じようとも、じつはそれだからこそ、第一の青春においてつひにめぐりあふことのなかつた一條のあかき道を探りあてることができよう⁴⁹⁾。

ここには、彼らの生命・身体を葬らんとしたファシズムからの解放感がほとぼしり出ている。そしてまた同時に、「暗い谷間」の時代に知り抜いた「人間」の本質からは、いかなる人も自由ではありえないという認識を、始点とする必要性を説いている。美しく無謬

の「理念」に潜む欠点—個としての人間を軽んじ、犠牲を強いて顧みない思想的態度—から目を背けてはならない、同じ過ちを繰り返してはならない、との厳しい指摘を、詩的な言葉に包むように、荒は書いた。

この「配慮」には、荒自身が社会主義をあきらめておらず、党员—ひとりの仲間—として、内からの変革を求めるという意図も含まれていた点を、確認しておきたい。

おわりに

日本軍国主義ファシズムの弾圧に屈することなく、獄中非転向を貫いた「英雄」—「前衛」として、「民衆」を指導し、革命へと導く希望に燃えた共産党中央の指導部に対し、戦前の運動が「自壊」した原因を、組織内部から提出し、変革を迫ること。これが、荒そして平野—つまり『近代文学』の七人の侍—が、有した目的であった。

こうした真剣な批判・意見の目的が、「単に共産党を蔑める」ことに在ったのなら、平野や荒が文章上で示した、細やかな表現上の「配慮」は必要なかった。先にも述べたように、その「配慮」は、むしろ共産党に対する「大枠での肯定」と「社会主義への期待」に基づいていた。

ファシズムの嵐からようやく解放され、新たな—社会主義的な社会への—出発において、彼らを突き動かした動機が、「やにさがり＝格好つけ」や「反革命」への擦り寄りであるはずもないことは、明々白々であった。

中野が後に、当時の発言における自らの誤りを認めたとしても、それは「下司なかんぐり」などと最大級の侮辱を以って、「高飛車」に撥ねつけたことが問題だったのではない。戦後直後に「論争」が起きた当時、荒・平野の真剣かつ切実なる「仲間」からの声に耳を塞ぐのみならず、ペンを以って「仲間」を背後から攻撃したことこそが、最も深刻な問題であった。その「対応」は、中野個人の人格や意識の表れというよりもむしろ、当時の共産党中央の姿勢を如実に示すものである。歴史学が、長らく扱うことを避けてきた重要な問題—「論争」の有した意義—を、70年を経るいまこそ、俎上に載せんとすることが本稿の目指すところであった。

荒の説いた「第二のヒューマニズム」に至る契機を何度も自らの手で葬ってきた左翼運動が、「双の眼」を以って見つめなおすべき点は、今なお過ぎ去らせてよいものではない、そう考えるのである。

1) 埴谷雄高「近代文学創刊まで」『近代文学』(近代文学社、1955年11月)47頁。

2) 転向についての体系的な研究としては1959年～1962年に刊行された、思想の科学研究会編『共同研究 転向』上・中・下(平凡社)がある。1978年に改定増補版が出され、これを底本とした東洋文庫版が2012年に復刊された。

3) 北河賢三『戦争と知識人』(山川出版社、2003年)4—6頁。

4) 鹿野政直『日本の近代思想』(岩波書店、2002年)175頁。

5) 久野収、鶴見俊輔、藤田省三『戦後日本の思想』(1959年、中央公論社)のなかで藤田は、『近代文学』グループが「マルクス主義の洗礼」を受け、社会的正義の観念と、外の世界で正義を実現してゆく重要性を学び、その蓄積が、彼らの「内省」の背景にあると指摘する。

6) 伊豆利彦「中野重治 批評の人間性」『国文学 解釈と教材の研究』(学燈社、1970年10月号)68—69頁。

7) なかの・しげはる「批評の人間性 1」『新日本文学』(新日本文学会、1946年8月、1巻4号)11頁。

8) 1944年(昭和19年)に、雑誌『現代文学』の同人であった荒・佐々木・小田切が逮捕された。この3名の逮捕を受け、平野は大井広介の計らいにより単身で九州の炭鉱へと逃げのび、埴谷からも特高の執拗な「訪問」に耐え忍ぶ生活を余儀なくされていた。

- 9) 田所泉『『批評の人間性』』『新日本文学』(新日本文学会、1979年12月)284頁。
- 10) 論争後の中野の自己批判さえも肯定する立場からは他に、神谷忠孝『『批評の人間性』』『国文学 解釈と鑑賞』(至文堂、1986年7月号)82—84頁、が挙げられる。
- 11) 吉田永宏「戦後『政治と文学』論争・その後—主として中野重治・平野謙について」『国文学』(関西大学国文学会、1977年9月号)106—107頁。
- 12) 吉田永宏「戦後『政治と文学』論争はなぜ流産したか」『国文学 解釈と教材の研究』(学燈社、1978年9月号)146頁。
- 13) 戦後「政治と文学」論争の結末を、「政治の優位性」に求めたものとして他に、菊田均『『政治と文学』論争 平野謙・他—中野重治・他』『詳解 現代論争事典』(流動出版株式会社、1980年)162—167頁がある。
- 14) 磯貝英夫「現代評論家の肖像 中野重治」『国文学 解釈と鑑賞』(至文堂、1968年9月号)85頁。
- 15) 磯貝英夫「荒正人 第二の青春」『国文学 解釈と教材の研究』(学燈社、1970年10月号)60—61頁。
- 16) 紅野敏郎『『第二の青春』荒正人』『国文学 解釈と鑑賞』(至文堂、1972年5月号)114頁。
- 17) 紅野は前掲論文において、「荒氏が赤木俊時代の仕事を一本にまとめられるべきだと思っている。赤木俊時代の仕事をこまやかにすくいあげ」、踏まえた研究が必要だと指摘する。赤木俊は、荒正人の戦中のペンネームである。のちに『近代文学』同人になる人々が携わった雑誌『構想』(昭和14年10月に創刊、以後、昭和16年12月に廃刊となるまでの7冊刊行)が、1984年に言叢社より復刻され、紅野が1982年に『構想』の検討を行った論稿も収録された点を指摘しておきたい。
- 18) このほか、荒の「第二の青春」などの批評について「論じた」ものに、林淑美『『批評の人間性』—『文学的自由主義』とのたたかい』『批評の人間性 中野重治』(平凡社、2010年)56—115頁がある。この文章は、主張の裏付けとなる事実の提示や、推論の合理性・論理性への考慮もなく、ただ荒正人を罵倒するために、曖昧な言葉を書き連ねているものと言わざるをえない。まず、思い込みから、荒正人を昭和十年代の文芸復興期の「文学的自由主義」者と同様であるとのレッテルを貼り、荒の問題提起の内容を「妄想」と軽んじた。戦後日本の社会や政治と深く関わる上で文学がいかにあるべきかをいち早く論じた荒に対し、その「真の意図」は「人間存在を超歴史的・超社会的存在に軽倒させることにあった」という、侮辱(滑稽なまでに抽象化された空想の羅列にすぎないが)を行った。戦後「政治と文学」論争を、ここまで挙げたどの論稿にも見られない程、穿った角度から貶めている。
- 論争の当事者であった中野重治本人が、自らの行き過ぎや誤りを認めているにもかかわらず、林はことさらに当時の論争を嘘で塗り固め、荒や平野の言を「犯罪」呼ばわりまでしている。独断と偏見を書き散らしているというほか無い文章が、2010年にもなって活字化されていること自体、この論争の主題の混迷を示している。重要な問題であるにもかかわらず、歴史研究者がこの問題を扱うことを避けてきたということも、林のような主張がゆるされる背景を生んだ一因であろう。
- 19) 埴谷雄高『『近代文学』創刊まで』『近代文学』(近代文学社、1955年11月号)38頁。
- 20) 荒正人「第二の青春」『近代文学』(近代文学社、1946年1月号)5頁。
- 21) 荒正人「回想・昭和文学四十年」『荒正人著作集 第二巻 文学的回想』(三・一書房、1984年)35—37頁。
- 22) 平野謙『文学・昭和十年前後』(文藝春秋、1972年)6—7頁。
- 23) 荒正人「第二の青春」7頁。なお、『荒正人著作集 第一巻 / 第二の青春』に収録された同文章は初出から修正されている箇所が見られる。本稿では初出に従って引用している。
- 24) 佐々木基一『昭和文学交友記』(新潮社、1983年)50—51頁。
- 25) 小田切秀雄『私の見た昭和の思想と文学の五十年』(集英社、1988年)111頁。
- 26) 荒正人「八・一五をめぐる」『『近代文学』創刊のころ』(深夜叢書社、1977年)46頁。
- 27) 雑誌『構想』は、1939年10月から1941年12月まで、全7冊刊行された。『構想』の中心的同人であった埴谷雄高は、雑誌『展望』に1971年1月から翌年4月にかけて発表された「座談会・歴史における人間の位置 I～VII」(椎名麟三・武田泰淳・中村真一郎・野間宏・堀田善衛・埴谷雄高)の中で、『構想』が「自爆」(自ら廃刊とする)となった経緯を「だんだん思想的にはきびしくなっちゃった。そして危なくなってきた。そのあげくに太平洋戦争が始まって、その翌年に統合ということになった。統合して同人雑誌を八つにしてしまおうという。そうしたら一つの雑誌に同人が百人以上になるのだね。…自爆したあと、佐々木君、荒君、平野君、全部『現代文学』に行ったんです。そして、平野君は『現代文学』の直接編集者になったんだ。」と述べている。『近代文学』の同人は、戦中の時代にも、粘り強く書き続けていたことが分かる。
- 28) 小田切進「解説『現代文学』について」『槐・現代文学 解説・回想及び著者別総目次』(臨川書店、1986年)によれば、『現代文学』は1939年12月、大井広介を中心とし、小熊秀雄、菊岡久利、杉山英樹らを編集同人として創刊された。1940年11月号より菊岡、平野謙、大井の3名が編集を受け持つようになった。世田谷トリオを大井に引き合わせたのは、平野であった。
- 29) 荒正人「回想・昭和文学四十年」124—128頁。
- 30) 平野謙「基準の確立」『新生活』(新生活社、1946年6月号)50頁。なお、この引用箇所は、平野謙『知識人の文学』(講談社、1966年)に収録される際、「私の関心は感傷を裏がえしにした安易な左翼的ヒロイズムへの倚りかかりによる戦争責任のアリバイ提出に対する警戒にかかっていた。」と、より穏便な表現に改められている。
- 31) 日本プロレタリア文化連盟は1931年10月、蔵原惟人の提唱で結成された。
- 32) 平野謙『文学・昭和十年前後』31—32頁。
- 33) 渡辺洋三『法と社会の昭和史』(岩波書店、1988年)は、三・一事件と四・一六事件の間に、1928年6月の緊急勅令による、治安維持法の三つの改「正」点を指摘している。第一：死刑の導入、第二：国体変革の場合に限った死刑の適用、第三：「結社の目的遂行のためにする行為」の規定追加である。第二・第三は後に猛威を

振るつたと、渡辺は指摘している。第二の「国体」概念は、解釈如何で犯罪者に仕立てあげることが可能となる危険がある。第三は共産党をはじめとした、あらゆる「結社」を取締り可能とする口実となった。1933年は最も検挙数が多く、1万8000人以上が逮捕され、1935年以前にあらかた共産党関係の組織は根こそぎ壊滅させられた。

34) 平野謙『文学・昭和十年前後』27頁。

35) 江口渙『作家同盟の解散』『文化集団』(1934年4月号)、『日本プロレタリア文学大系 第7巻「弾圧と解体の時代」(下)』(三一書房、1955年)再録、332頁。

36) 平野謙「ひとつの反措定」『新生活』(新生活社、1946年4・5月合併号)48—49頁。

37) 平野謙「政治と文学」『新潮』(新潮社、1946年9月号)7頁。

38) 「ハウスキーパー」は単なる衣食住を世話する「家政婦」の仕事だけでなく、「肉体関係」も強要されることがあった。また、党の運動に不可欠であったレポーター(連絡係り=「レポ」と呼ばれる)仕事も兼ねることがあったと、自らがその経験者である福永操は『あるおんな共産主義者の回想』(れんが書房新社、1982年)で主張している。

鈴木裕子『女性 反逆と革命と抵抗と』(社会評論社、1990年)で挙げられているだけでも、1928年に福本和夫のハウスキーパー中村恒子が大阪で逮捕。同年、河合悦三のハウスキーパーであった平林せんが新潟で逮捕。1933年より党中央委員の袴田里見のハウスキーパーであった田口ウタが1935年に検挙されている。

後に蔵原惟人の妻となった中本たか子は、『光くらく』(三一書房、1947年)において自らの経験を明らかにしている。中本は1930年から党中央の田中清玄のハウスキーパーとなった。さらに中本は、岩尾家定のそれにもなり、妊娠もしているが、岩尾との恋愛は運動および党の承認がなかったために断念した。1931年に精神を病み松沢病院に入院した。

39) 平野謙の直弟子である中山和子は、「女の視点・男の視点」『昭和文学の陥穽—平野謙とその時代—』(武蔵野書房、1988年)において、平野が「女」の視点を有していたと評価している。

同書収録の『『男性的偏向』をめぐって』の中で、三田村四朗(三・一五事件の後、党再建に従事した)のハウスキーパーであった森田京子について取り上げている。森田は1934年に浅草のアジトで逮捕され、三田村に妻子があったことを知らされ、獄中でうつ病を発症した。三田村と生活を共にする中で、悩んだ末に関係を持つに至り、愛情を抱くようになっていたという。

40) ノーマ・フィールド『小林多喜二』(岩波書店、2009年)は、小林多喜二を再評価する視点から『党生活者』を再考しているが、(本稿で確認してきたような)文脈に作品を位置づけているとは言い難い。ノーマ・フィールドは、「笠原の稼ぎに一家事労働にも全面的に頼りながらも、彼女の態度に関して説教ばかりする『私』の態度こそあまりにも身勝手だ」としつつも、続けて「多喜二がこれに無自覚であったとは考えにくい。」と、何ら論拠を示さず、憶測だけはこの問題を退けている。

その上で、「個人としての生活」を犠牲にすることが、党活動によって正当化されるかを、問題とした作品だと述べ、「政治と文学」論争とは争点が異なることを指摘しようとしているが、その指摘は平野による「人間蔑視」批判の中に包摂されるものでしかない。

また彼女は、山口俊雄編『日本近代文学と戦争—「十五年戦争」期の文学を通じて』(三弥井書店、2012年)収録の「女性、軍需産業、そして<私>—『党生活者』はなにを訴えてきたのだろうか」の中で「戦後の《政治と文学》論争ではハウスキーパーが話題をさらってしまったが、本来の課題は文学における《政治の優位性》あるいは《政治主義》だった。」(172頁)と結論している。この主張は、戦後の「政治と文学」論争の極度の矮小化であり、端的に言うて誤りである。そもそも、徳永直の1933年「創作方法上の新転換」などに見られるように、共産党が、「政治主義」の名の下に文学を従属させたことへの異議申し立ては、第二次大戦後に突如として出てきたものではなく、戦前においても少数の者から問題提起されていたことがらである。徳永は、プロレタリア作家が方法的に作品を政治的要請に従属させている傾向を「癌」と呼び、小林多喜二を先頭としていると指摘した。この点と、ノーマ・フィールドの結論は明らかに矛盾しているが、彼女は戦前の「政治と文学」論争の文脈を認識していないようである。

平野・荒は当然、戦前からの問題を踏まえた上で、より鋭い問題を提示していた。そうした議論の歴史的な文脈を踏まえることなしに、「この小説が侵略戦争に対する抵抗を大きな課題としていたことがほぼ無視された」(119頁)ことへの批判を試みているが、これに関しても、彼女の、この問題に関する無知、あるいは事実認識の底の浅さを証明するものでしかない。なぜなら、平野・荒はともに共産党支持の立場から、いわば内部批判的に「政治と文学」論争を行ったのであり、「侵略戦争に対する抵抗」という点はすでに戦中から共有済みの論点だからである。

総じて、ノーマ・フィールドの『党生活者』擁護論は、戦後「政治と文学」論争の内容・経過を丁寧に踏まえているとはいいがたく、日本の歴史的な文脈に無知であるか、あるいは無知であるふりをして「一般書」を書いているという印象を免れない。

41) 宮本顕治は、「新しい政治と文学」『人民の文学』(岩崎書店、1947年)で共産党が「ハウスキーパー制度」といふものをつかって採用したことはなかった。「党は干渉しなかった。」(287頁)と断言した。

宮本百合子も「社会生活の純潔性」『宮本百合子全集 第16巻』(新日本文学出版社、1980年)で、自身とその周辺の人の経験には、「ハウスキーパーの『制度』などは決してなかった」(114頁)という。

だが、注38及び39で確認した記録と複数の当事者による証言を前に、宮本らの主張は偽りであったと言わざるをえない。

対談「ハウスキーパーの虚像と実像」『運動史研究4 特集 五〇年問題—党史の空白を埋める』(三一書房、1979年)の中では、「党の制度(方針)として存在していなかった」という立場の宮内勇らと、「党が党の仕事として命令してやらせた」とする福永操の主張の対立が鮮明である。宮内は「断らなかった女の側にも問題があ

る」とまで言い、そこに原泉（中野重治の妻）が同意する場面もある。

この対談でハウスキーパーの分類が話題となってもいるが、福永は「問題は、使い捨てにされた女性」であるとし、思想的な教育もなされていなかった「箱入り娘」を妻子ある男性活動家にあてがった点、それが党の命令のもとなされた点を強調している。最終的に、ハウスキーパーの問題は、肉体関係を強要したか否かにあるというよりも、女性を「家政婦」や「レポ」といった活動に縛り付ける、女性蔑視の傾向が左翼運動の男性幹部に明らかに存在したことが、この座談の大枠の結論となっている。

近年ふたたびハウスキーパー問題を取り上げたものとして、阿部浪子『平野謙のこと、革命と女たち』（社会評論社、2014年）や岡野幸江「平林たい子にみるく愛情の問題—コロンタイの恋愛論とハウスキーパー問題を通して—」『昭和前期女性文学論』（翰林書房、2016年）が挙げられる。いずれも、平野が提出した問題が、中野の言うところの「空想」や「ゴシップ」では全くなかったことを裏付けるものである。

42) 小林多喜二「党生活者」『日本プロレタリア文学大系 第6巻 弾圧と解体の時代（上）』（三一書房、1954年）55—56頁。

43) 野間宏は『日本プロレタリア文学大系 第7巻「弾圧と解体の時代」（下）』のなかで、「ヒューマンイズムこそは、せまってくるファシズムに対して抵抗するために、よびだされた言葉であった。すでにプロレタリア文学はその組織を失い、集団としては旗を下ろしてしまっている。ヒューマンイズムこそは、多くの文学者の統一を、はかることのできる立場であった。」と位置づけている。これはフランスで開催された文化擁護国際作家大会でファシズムに断固反対する声明が出されたとの報道が日本に伝えられた影響によるという。だが、「ファシズムの進行ははやくインテリゲンチヤの不安動揺は激しかった。さらにまた政治的な警戒心から、極度に政治運動と関係を結ぶということがさげられるようになっていた。そのためにヒューマンイズムが主張されながら、一人一人が組織として集るということがなく、従ってその主張も力を生みだすことができなかつた」（429頁）と、日本の文学者が反ファシズム政治戦線を形成する状況になかった点を指摘している。

44) 三宅は『『政治』の不可能性と不可能性の『政治』』『現代思想』（青土社、1998年）において、荒が戦後直後に批判した「理念」は「人間主義的マルクス主義」であると指摘する。その「理念」の不可能性を導く根拠について、「『個人』と『人間』の通約不可能性である」（229頁）と指摘する。『『理念』が不可能になることで『理念』に支えられていた『政治』も不可能になる』と述べた上で、荒は『『政治一般』に対して実体としての『文学』を対置しているわけではない』と、政治か文学かといった単純な二者択一を問題としていなかったと述べている。

また、荒が「左翼運動の唱える『民衆』との所謂『連帯』という観念の危うさを指摘」（235頁）し、『『政治』の主体の複数化を要請』（236頁）した点や、文学者の戦争責任の追及にも、言及している。

そして、荒の言葉に「賭けられていたこと」の重要性は、『『政治』の不可能性にも関わらず『政治』が消去できないとすれば—如何にその不可能性を抑圧することなく『政治』が可能となるかという問い』（238頁）であったと結論づけている。

「政治」の不可能性を抑圧しない「政治」について、三宅は埴谷雄高の言葉で、『『弱さ』を抑圧しない『政治』』（242頁）とも（ある程度）言えるとしている。戦前の左翼運動の経験に対する深い失望を抱えながらも、思想的に転向することなく、戦後は共産党へ入党し、「政治」すべてを諦めるのではなく、書くことを通じて、共産党に内部からの変化—より「弱さ」を抑圧しない「政治」に少しでも近づけるよう—を求めたと、言うことができるだろう。

荒の「問いに対する答えを我々も未だもってはいない」と三宅が述べてから、20年余り経とうとしている今、残念ながら、埋もれていた荒の「言葉」をふたたび光の当たる所へ取り出すことから始めねばならない現実がある。

45) 荒正人「民衆とはたれか」『近代文学』（近代文学社、1946年4月号）9—10頁。

46) 荒正人「第二の青春」7頁。

47) 荒正人「第二の青春」11頁。

48) 荒正人「第二の青春」12頁。

49) 荒正人「第二の青春」15頁。